五

騎馬千騎が亀伏山の麓に整列していた。歩兵の本隊三千人は、着くのが夕になりそうだった。本隊が着く前に、とりあえず地形や侵入路だけでも調べておくことだ。杜愔はそう考えて斥候を出していた。さほど大きな山ではない。むしろ、小ぶりでなだらかとさえ言える山だった。ここに小賊が立て篭もっていたのは知っていた。ただ、太原府を襲うこともなく、取り立てて無法を働くわけでもなかった。むしろ、賊としては大人しいとさえ言えた。だから、これまで亀伏山に注目したことはなかった。山を詳しく調べたのも、これが初めてだった。

※斥候　偵察兵。

どうしてこんなことになったのか。杜愔には理解できなかった。相手はたかだか百人前後だったという。もちろん、禁軍が壊滅的な打撃を受けたのは、最後に現れた遼兵によってではあったが、それ以前に捕らえれば済んだ話だった。何故それが出来なかったのか。蒙重はともかくとして、馮湧は若く才能のある将軍だった。開封府の禁軍高官と繋がりがあり、その引きで若くして将軍になったと噂されていたが、杜愔は評価していた。高官の引きがなくとも、いずれは頭角を顕すだろうと思っていた。高官との繋がりは、それを早めただけのことだ。杜愔はそう考えていた。ゆくゆくは自分の後の経略使にと考えてもいた。それが戦死だった。どこからともなく現れた女剣士との戦いに敗れたとのことだった。信じられなかった。馮湧の槍は、間違いなく一級のものだった。禁軍の中でさえ、その槍を超える者は数人しかいないだろう。それが、一介の武芸者に敗れるなどとは、とても信じるわけにはいかなかった。何か別の理由があったのだ。杜愔には、そうとしか思えなかった。戻って来た兵達が、罪人は宋家村の保正の娘だと言っていた。本当にそうなら、これはおそらく冤罪だ。以前、馮湧と酒を酌み交わした時、馮湧は宋家村の娘のことを随分好意的に話していたことがあった。出来れば一度、話をしてみたいとも言っていた。

それが本当の理由かもしれない。杜愔は思った。それなら、馮湧が騎馬隊を退かせたのにも納得がいく。問題は黒い大男、黒旋風だ。奴がいたので積極的な攻撃が出来なかった。その名に萎縮してしまったのだ。若さゆえの甘さか。杜愔は惜しんだ。私だったらそんな名に怯むことはない。今度こそ、太原府禁軍の汚名を雪がねばならない。杜愔はそう決心していた。

「今夜は、ここで野営となるのでしょうか」

都虞候の平真が訊いた。長年の忠実な部下だった。農民出身のため将軍に上げることは難しかったが、武術の腕でも、兵の統率力でも、そこらの俄か将軍よりも遥かに優秀だった。こんな男がいつまでも都虞候でくすぶっている。それが、今の宋という国の弱点かもしれない。馮湧につけた楊佶も同様だった。力は十分にあるのに、賄賂や引きがないために昇格できない。そんなことが、この国には多すぎた。

「そうだ。まだ斥候が戻っていない。動くのは、その報告を聞いてからだ」

「そうですね。馮将軍、蒙将軍の失態は、情報不足のまま動いたからだと考えられますから」

「儂もそう思う。まったく、あと三歳で身を退こうと思っておったのに。こんな厄介が持ち上がるとは」

「あと三歳で……そうだったのですか」

「儂ももう五十七だ。六十になったら身を退こうと思っていたのだ」

「そうでしたか。それなら私も、三歳後に除隊しようと思います」

「何を莫迦なことを言っておる。おまえはまだ三十七ではないか」

「将軍のおられない軍に、残っていようとは思いません」

杜愔は複雑な想いに駆られた。平真は正義感が強い。正しいと思うことは、歯に衣着せずに直言することが多かった。それは特に、軍の装備や糧食の調達に対してだった。一徹な平真にとって、そこでの賄賂の横行に我慢がならないのだろう。蒙重などとは、何度ぶつかったか分からないほどだ。

「軍が嫌だったのか」

「軍がではありません。軍にはびこる不正がです」
平真はそう言うと、馬首を返して兵達のもとに戻って行った。幕舎の外には、杜愔と二人の従者だけが残された。

・・・・

三の木戸の内側に、全員が集まっていた。陳達の三百余りが加わったので、それでも一応の賑わいを見せている。
「これから、人員配置と作業の分担を説明する」
李逵の声は、三の木戸を通り越して一の木戸にまで達しそうだった。
「そして、これから指揮を執るのは、ここにいる公孫勝殿だ」
李逵は、右隣に立つ公孫勝に目を遣った。公孫勝は、別段緊張した様子もなく、皆の前で平身の礼※を執った。

※平身の礼　立ったままする礼。

「かの墨家の末裔だ。守城戦に、これほど頼もしいことはない。皆、公孫勝殿の指示を必ず守るように。これは、儂の命令でもある」
陳達の兵達が、緊張したように身を正した。陳達の兵には、銅提山時代の李逵の部下が多い。李逵の命令。部下達にとって、それは絶対的なものだった。
「兄貴、そんなことは当然だ。公孫勝殿の指示は兄貴の命令と一緒だ。俺達は喜んで従うつもりだ」
李逵と陳達の対面は済んでいた。お互いに、言葉に出来ない想いを分かち合った後だった。特に蘇源の死。二人にとってそれは、あまりにも大きな悲しみだった。
「私の指示はこれからの作業についてだ」
公孫勝の声が響いた。大きくはないのに、不思議によく通る声だった。
「一の木戸の外側に、三段にして石積みをしてもらいたい。少し崩しただけで、斜面を転がりやすいように工夫してだ。この作業には、陳達殿の隊から百人を割いてもらいたい。次に一の木戸と二の木戸の

間、正確に言うと一の木戸の後ろ側だが、ここを深さ二丈、幅三丈ほど掘り下げてもらいたい。ここに陳達殿の残りの兵を。残った者達は私と共に、罠を仕掛けるのを手伝ってもらいたい」

公孫勝は、そう指示して陳達の部下達に頷いた。部下達も一斉に肯き返した。

「次に、実戦配備に移る」

李逵の声だった。

「これは公孫勝殿と儂が、協議しながら決めたことだ。反論は、出来ればしないでくれ」

皆一斉に肯いた。

「一の木戸の守りは陳達と兵二百。砦の外側に聞起と陳統。兵は陳達と相談して決めること。二の木戸の守りは儂と曹瑛。兵は百。三の木戸の守りは公孫勝殿。兵はない。裏の抜け道の守りに石勇。兵は蘇源の部下十五。以上だ」

陳達が固唾を飲んだ。

「二の木戸が抜けられたら終わりということか……」

「そういうことだ」

李逵の声は落ち着いていた。

「分かった、兄貴。俺達が一の木戸を死守する」

公孫勝が首を振った。

「いや、敵を通してもらいたいのだ」

陳達は怪訝そうな顔をした。

「通すとは」

「一の木戸の守備隊は、堅く守る振りをして敵を二の木戸の大穴に導いてもらいたい」

「そうか、敵は一の木戸の裏に、そんな穴があるとは思わない。そこを狙い撃ちってわけか」

「そうだ。そのために儂と曹瑛が就く」

李逵だった。

「これは、城郭の濠と考えてもらいたい。水のない濠と」

公孫勝の声は冷静だった。
「儂の斧、曹瑛の弓があれば、よほど大量の敵でない限り討ち漏らすことはない」
「そこで、陳達殿には、一度に通す敵の数を調節してもらいたいのだ」
「どのくらい」
「百がちょうどいい。二百までなら、何とかする」
答えたのは李逵だった。
「掘り出した土は」
陳達の兵が訊いた。
「一の木戸の左右に盛り上げてもらいたい。敵がその間を進むように」
「そうか、進入させる範囲を狭(せば)めるのだな」
陳達は一人で納得していた。
「出来ればここで五百を討ちたい」
公孫勝が言った。
「五百でいいんですか」
訊いたのは陳統だった。
「この戦いは、敵と真正面からぶつかる戦いではない。雪華殿が回復する時間を稼ぐ戦いだ。それまで、出来るだけ犠牲を少なくして持ちこたえるのが目的だ。だから、緒戦が重要なのだ。緒戦で打撃を与えれば、敵も慎重になり持久戦に持ち込める。こちらには食糧、水共に十分ある。敵も太原府からの兵站線(へいたんせん)※は短い。切られる心配はないから、持久戦を厭(いと)いはしないだろう。そこが勝負の分かれ目なのだ。逃げおおせたら勝ち。そう思ってもらいたい」

※兵站線　軍の食料補給ルート。

「どのくらいで雪華姉ちゃんは……」
聞起だった。
「弱った筋力を戻すのを含めて二十日。黄玉はその半分だ」
公孫勝が力強く言った。聞起の顔に光が戻った。
「分かった。俺と陳統は、うまく敵を追い込むか、誘い込めばいいんだね」

公孫勝が少し驚いた顔をした。
「聞起は頭がいい。任せて大丈夫だ」
李逵が公孫勝に言った。
「俺は……」
晁蓋が不安そうに訊いた。
「おまえは公孫勝殿と共にいろ。いざとなったら、嬢さんを背負って逃げるのだ」
「俺は戦える。聞起や陳統と共に砦の外に出る」
「だめだ。その怪我では足手まといになる。それに、おまえの馬では朧月や弦月にはついていけん」
李逵の厳しい声に、晁蓋は黙り込んでしまった。
「以上だ。よく分からなかった者は、もう一度話すから言ってくれ」
説明を求める者はいなかった。
「日没まで、四刻はある。取り掛かるぞ」
李逵の声に応えて、全員が一斉に持ち場に向かった。
小屋の前に残った李逵と公孫勝のもとに、曹瑛が一人で近付いて来た。
「どうした、曹瑛」
李逵が訊いた。
「禁軍が諦(あきら)めなかったらどうなるでしょうか」
曹瑛が心配そうに訊いた。
「それも考えておる」
「禁軍がこの砦に集中するとしたら、太原府は手薄になります」
公孫勝が、感心したように曹瑛を見た。
「太原府で何かを引き起こせば、禁軍にも動揺が走ると思います」
「何かとは」
訊いたのは公孫勝だった。曹瑛は言葉を続けた。
「例えば、宮城(きゅうじょう)に侵入するとか」
「宮城に入ってどうする」
李逵が訊いた。曹瑛は、意を決したように言った。

「黄文柄を殺します」
李逵と公孫勝は顔を見合わせた。
少しの間、沈黙が流れた。口を開いたのは公孫勝だった。
「曹瑛、それは李逵殿と二人で検討したことだ。だが、いかに手薄とはいえ、宮城の警備はこれまで以上に厳重になっているだろう。それに、禁軍はほとんど出動しているが、廂軍はそのまま城内に残っている。極めて困難な策と考えられるので、採用を見送ったのだ」
公孫勝が噛んで含めるように言った。
「曹瑛、可能なら一番の策なのだが、実現の可能性は低い。それに、黄文柄を殺すことが出来ても退路はない。大人数では、宮城に潜り込むことは出来ん。つまり、成功しても生きて戻ることは出来んということだ。そんな危険なことはさせられん」
李逵がきっぱりと言った。
「そうですか」
曹瑛は納得していない様子だったが、それ以上何も言わなかった。
食事の用意をするために、小屋に向かった曹瑛の後姿を見詰める李逵の目は、複雑な色を浮かばせていた。
「李逵殿、あなたの息子や娘達は素晴しいな。頭もいいし、勇気もある。どうやってここまでになされた」
公孫勝が、感極まったように訊いた。
「腕も立つ。もともと備わっていた才能もあるが、やはり嬢さんがおったからだ」
公孫勝を振り返った李逵の顔は晴れがましかった。
「曹瑛の言葉には一理ある」
公孫勝が慎重に言葉を選んだ。
「だが、むざむざ死にに行くような真似はさせられん」
李逵が遮った。
「もちろん、あの若者達を行かせはしない」
「では、誰を」
「私か時遷」

李逵は即座に首を振った。
「莫迦なことを。公孫勝殿に死なれては、その後ここを持ち堪えさせることが出来なくなる。時遷は儂等の仲間ではなく、九天玄女様の部下だ。死んで来いなどと言える筋合いではない」
「だが、それが最も効果的だ」
公孫勝は冷静に言い放った。
「駄目だ。その策は呑めん」
李逵はそう断言した。
「まあいい。それも戦局の推移を見てからだ。今は緒戦に向けて、準備を進めることが肝腎だ」
公孫勝は、そう言って木戸の方に目を遣った。
落ちかける陽の中で、皆懸命に与えられた仕事に励んでいた。公孫勝は、複雑な想いでそれを見ていた。何とか二十日はもたせられる。だがそれは、犠牲なしでというわけではない。大事なものを守るために、誰かが、何かが犠牲になる。戦いでは、それは当然のことだった。そして、そのために真っ先に動くこと、それは墨者※の義務のようなものだった。※墨者　墨子の信奉者。
「私しかいない」
公孫勝は小さく呟いた。

・・・・

遠い落日を背にして、斥候の兵が戻って来た。斥候は十人出していた。
二人はまだ戻っていないが、八人の話を聞けば、おおよそのことは分かるだろうと杜愔は思った。
「どうだった」
杜愔の代わりに平真が訊いた。
斥候の一人がそれに答えた。
「山はなだらかですが、少し入ると木々が鬱蒼として、これを抜けて

行くのは困難と思われます。どうしても、正面の道から攻め込むしかないと思います」
平真のやり方だった。通常、斥候には見てきた事実のみを話させる。しかし平真は、そこに必ず斥候兵の意見なり、感想なりを付け加えさせる。それはたった一言でもよかった。事実しか述べない兵を、平真は二度と斥候には使わない。
「おまえは」
平真が隣の兵に訊いた。
「山中には、多くの罠が仕掛けられています」
「例えば」
「木々の間に細い糸が張られていて、これに触れると鳴子が動く仕掛けになっています。他に、落とし穴らしきものも」
「それにどう対処する」
兵士は少し考えた後、平真に答えた。
「近くの民家から豚を集めて、これを放って罠を暴きます」
平真は大きく肯いた。そして、杜愔の顔を見た。
「経略使様、この者を百人隊の隊長にしてもよろしいでしょうか」
杜愔はそっけない様子だったが、平真の言葉に賛同した。
兵士が驚いた顔で、杜愔と平真の顔を交互に見た。
「驚くことはない。前例はある。おまえのような有能な者は、これからも昇進の機会があるだろう」
平真が、驚く兵士に言った。兵士は満面に笑みを浮かべて下がった。
「次は」
平真の声に、最後の方に着いた兵士が進み出た。
「山の後ろの方に、三百人ほどの賊と思われる一隊を見ました」
平真の目が鋭くなった。
「何時だ」
「正午頃だと思います」
「山に入ったのか」
「確認しておりません」

「そうか」
平真の声は冷たかった。
「この者の装具を解き、三日間晒すのだ。」
兵士は、うっと息を詰まらせて下がろうとした。二人の騎馬兵が、その兵士の両脇を抱えて連れ去って行った。
※晒す　頭頂の髪を剃り、木に縛り付けて見せしめにすること。
平真は杜愔の方に向き直った。
「経略使様、賊が山に入ったのは間違いないものと思われます」
「そうだな」
杜愔は暫く山の方を見ていた。
「これで、篭っているのは三百以上ということか。平真、明日の攻撃は中止しよう。明日一日、斥候を倍にして敵情を探ることにする」
杜愔はそう言って、幕舎の中に入った。
「はい」
平真はそう礼をして杜愔を送ったが、心の片隅で、これでいいのかと感じていた。何か大きな間違いをしたような気がした。一気に砦を攻める。それこそ正しいのだと直感は告げていた。だが、自分がそれをするのは越権行為だった。十倍以上の兵力差だ。平真は、そう思って納得しようとした。

・・・・

火が時々、踊るように弾け散った。大きな火を囲んで、それぞれが横たわったり、話し合ったりしていた。身体には疲労が溜まっていたが、それを辛いと言う者はいなかった。
「瑛姉ちゃん、本当にうまかったよ」
陳統がそう言って、曹瑛に笑いかけた。
「陳統、お世辞はいいわ」
曹瑛はそう言って陳統を睨んだが、まんざらでもなさそうな顔つきだった。

「お世辞じゃないよ。瑛姉ちゃんをお嫁にする奴は、この宋で、一番の幸せ者さ。気立てはいいし綺麗だし、おまけに料理も上手だし」
陳統の顔は真面目だった。
「莫迦なことを言ってないで、明日の作業のことでも考えていなさい」
曹瑛は、心に微かな痛みを感じた。そうか、自分にはもう、そんな普通の幸せを夢見ることなど出来ないんだ。こんな汚れた身体で、おまけに、国から追われるお尋ね者になってしまったのだから。
「あれ、変な小母さんが来た」
陳統が声を上げた。
九天玄女が、時遷だけを連れて火の側にやって来た。どことなく威厳を漂わせている。曹瑛はそう思った。
九天玄女は、火の側に置いてあった丸太に腰掛けると、暫くの間曹瑛や聞起達を見詰めていた。そして、漸く口を開いた。
「やはり、夜になると寒いの。こんな時は、暖かい火が一番のご馳走に思える」
そう言って、曹瑛に微笑んだ。曹瑛は少しどぎまぎして、新しい薪を火の中に投げ入れた。
「どうぞ、存分におあたりください」
曹瑛は微笑み返した。何故か死んだ母を思い出した。
「優しいのう。地会の星よ」
九天玄女が満足そうに言った。
曹瑛は、それが何を意味するのか分からず、戸惑ったように薪を突いて火を熾していた。
「曹瑛、私がおまえをそう決めた。地会の星とな。仁の心を持つ、地、即ち人の要の星とな」
「仁の心……」
「そうだ。仁、それは他人を慈しむ心。人が持ちうる最も美しいものの一つだ」
「わたしがそんな心を持っていると」
「仁の心はな、宋雪華も黄玉も持っている。そして、あの黄文柄でさ

えな、蚊の目玉ほどは持っている」
「総ての人に備わっているのですね」
曹瑛の言葉に、九天玄女は肯いた。
「たがな、曹瑛よ。私は、おまえほど輝く仁の心を知らん。この七十歳という長い生の中で、間違いなくおまえの仁が最上の輝きを放っている。地会の星よ、その心を失ってはならぬぞ。おまえはやがて、天魁の星に集う数多の星達を、繋ぐ役目を果たすことになるのだ」
「天魁の星……」
「宋雪華のことだ。黄玉は天貴の星に決めた。李逵は天殺の星だ」
曹瑛は、何が何だか分からなくなっていた。
「気にすることはない。私が勝手にそう呼んでいるだけだ」
「天の星と地の星は、何か違いがあるのですか」
「そんなに違いはない。あくまで私の印象と言っていい。強いて言えば、天の星には、人の心からかけ離れたところがあるが、地の星は、それよりもう少し人の近くにいる。そんなところか。黄玉を見れば分かりやすい。宋雪華のために必要だと思ったら、躊躇いもせず自分の命を投げ出すだろう。李逵も似たようなものだ。それが、天の星。分かるな」
曹瑛は、笑いながら分かりますと答えていた。
不思議な女性だった。とても七十には見えないし、近寄り難いようで、暖かい。曹瑛は、九天玄女を好きになっている自分に気付いた。
「聞起だな」
九天玄女が聞起の目を覗き込んだ。聞起も黙って見返していた。
「聞起、おまえは天速の星だ。その類稀な才を活かし、天魁の星の夢を叶える力となるのだ。おまえの役割は重大だ。私には感じられる。おまえはやがて、星達にとってその命運を決するほどの働きをするはずだ」
聞起はぽかんと口を開けたまま、九天玄女を見詰めていた。何を言われているのか全く分からない。そんな様子だった。
「俺は、俺は」

陳統が九天玄女の隣に座った。後ろに立っていた時遷という男が、少し笑ったように見えた。
「陳統だな。黄玉と同じように、純な心を持っている」
「玉姉ちゃんと同じ……何かしっくりこないな」
「外から見る形は違っても、その根っ子は同じようなものなのだ。黄玉は天魁の星だけに。おまえや地会の星は、星達、いや人総てにな」
あ、そうか。曹瑛は、胸につかえていた塊がすとんと落ちたような気がした。黄玉とわたしの違い。どこかで、雪華姉さんと黄玉を羨んでいたその理由。それが今、はっきりと分かったのだった。黄玉は、雪華姉さんしか見ていない。わたしは、雪華姉さんだけを見ていたのではなかったんだ。もちろん、雪華姉さんが一番大事。でも、だからといって他の人がどうなってもいいとは思えない。踏み込まなかったのはわたし。雪華姉さんとしっかり繋がっているのに、黄玉のことを羨んでいた。悪いのはわたし。黄玉は、あんなに一途に慕っている。本当に天貴の星だわ。貴いほど純な心を持っている。曹瑛はそう思った。
「陳統、おまえは地俊の星だ。その俊敏な身体と知恵を遣って、天魁の星を助けるのだ」
陳統は満面に笑みを浮かべて肯いた。
「石勇。おまえは苦労を重ねたな」
九天玄女が石勇に顔を向けた。石勇は、九天玄女の視線から逃げるように下を向いた。火は相変わらず、逞しく燃え上がっていた。
「おまえの苦労が、おまえの心を醜くした。だから地醜の星だ。だがな、落ち込むことはない。今のおまえは、本来持っているおまえの心、忠のの心を取り戻しつつある。天殺の星に感謝せよ。李逵はな、おまえのことを息子のように思っている」
突然、石勇の咽び泣きが聞こえてきた。だがそれは、哀しみではなく、心を洗うような清らかさのように感じられた。
「そうだ、そうして心置きなく泣くがよい。その涙一つ一つが、おまえの心を洗ってゆくのだ。いつかおまえは、美しい地醜の星になるこ

とだろう」
九天玄女の声は、限りなく優しかった。
曹瑛は石勇に身を寄せ、大きな背中を撫でてやった。曹瑛の手から、不思議な暖かさが体中に広がってきて、石勇は思わず曹瑛を振り返った。優しい目が、自分を見詰めていた。また、目から涙が溢れてきた。俺は一人ではないんだ。こんなに優しく撫でてくれる瑛姉ちゃんがいる。父のように育ててくれる李逵の兄貴がいる。頼りになる玉姉ちゃん、見習いたい起兄ちゃん、少し生意気だけど心やすい陳統、そして、雪華姉ちゃんだ。その想いが、今石勇の心を洗っていた。
「俺は」
晁蓋だった。
九天玄女の話を聞いていて、晁蓋も興味を抱いたようだった。
「おまえか……」
九天玄女はそのまま黙ってしまった。
晁蓋が怒りの色を浮かべた。
「何だよ、石勇でさえその何だ、星っていうものを貰ったのに、俺には何もなしかよ」
九天玄女は、憐れむように晁蓋を見た。
「聞かぬ方がよい。おまえは、確かに重要な役割を持っている。だがな、おまえは星ではないのだ。星ではないが、星にとって大きな意味を持つ人間なのだ。特に天魁の星にとってな。天魁の星が目覚めるための、おまえは鍵なのだ」
晁蓋は不満そうだった。
「あんたは、勝手に星の名をつけてるって言ったじゃないか。どうしてそんなことが分かるんだよ」
「七十歳も生きているとな、何となく先のことが見えてしまうのだ。それは時に、辛いことでもあるのだがな」
「結局、俺は仲間はずれか」
晁蓋は、拗ねたように燃え盛る火を見詰めた。
「おまえも仲間なのだ。ただ、皆とは少し役割が違う。それだけのこ

とだ」
晁蓋はもう、口を開かなかった。九天玄女も黙ってしまった。
「晁蓋、おまえは俺達の仲間だよ」
陳統が言った。泣いている石勇も肯いた。
「まあな。ちょっと頼りないけどな」
聞起だった。
「雪華姉さんも、きっとそう思ってるわ」
曹瑛が励ました。
晁蓋の肩が少し動いたようだった。泣き笑いしてる。曹瑛はそう思ったが黙っていた。
燃え盛る火の勢いに押されながらも、山中の闇夜は刻々とその深さを増しているようだった。纏わりつくような夜の重さを感じながら、曹瑛の想いは募るばかりだった。誰かが、何か決定的なことを起こさない限り、この戦は終わらない。面子を賭けた禁軍でさえ退かざるをえないこと。それは、一つしか考えられなかった。やるしかない。それもわたしが。曹瑛は弾け散る火の粉を、ただじっと見詰めるだけだった。